学校と博物館をつなぐ情報誌 No.230（令和3年9月号）

いのちのたび

〒805-0071 北九州市八幡東区東田二丁目４番１号
Tel 681-1011 Fax 661-7503
HP：https//www.kmnh.jp/
発行：いのちのたび博物館 ミュージアムティーチャー

ワッキー

9月に入っても、まだまだ新型コロナウイルス感染症が心配ですが、当館ではしっかり感染予防対策を行っています。皆さんも来館時にはマスク着用や検温など基本的な対策をお願いしますね！
さて、今回は、ただいま開催中の「THE モンスター展 Ⅱ」の展示の一部を紹介します。

夏の特別展 「THE モンスター展 Ⅱ －攻撃と防御－」

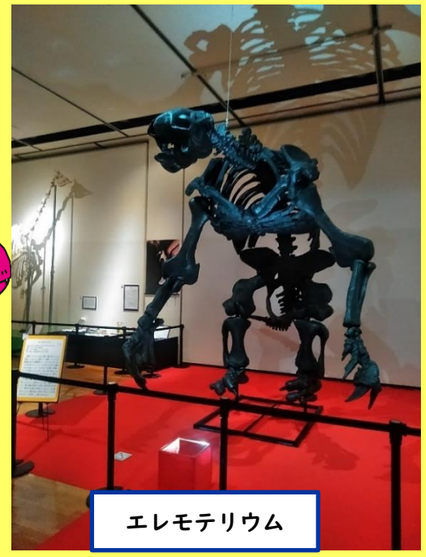
好評開催中！！

これは、ぼくたちみたいな恐竜じゃないよ。約150万年前に絶滅したナマケモノの一種だよ！

イリエワニ

オオカミ

バショウカジキ、チーター



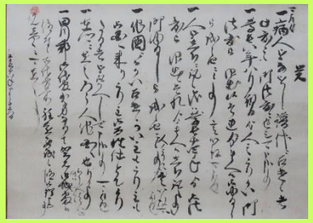
エレモテリウム

オオカミやワニなどのはく製が近くで見れるよ。

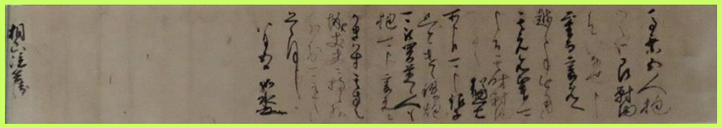
9月26日（日）まで開催中です。見に来てねー!!

企画展「北九州の古文書」 9月13日（月）～10月31日（日）

3階のぽけっとミュージアムで、北九州ゆかりの古文書や著名人の古文書を展示し、
初心者の方にもわかりやすく紹介しています。
一般的に古文書とは和紙に草書体などのくずし字で墨書され、
誰かが誰かに出したものです。



小倉城の城主だった細川忠興の古文書だよ！ 読めるかな？



豊臣秀吉の軍師だった黒田如水の古文書もあるよ。

ミュージアムのタネ

進化とは何だろう？

現在の地球に生息している鳥類は約１万500種にものぼります。この多様性は、小さな進化の積み重ねによって姿かたちが変わってきた結果生じたものです。

ところで「進化」とは、具体的にはいったいどんな現象なのでしょうか？それを知るヒントは、ガラパゴス諸島にあります。かつてダーウィンが訪れた島々では、今もなお様々な生物の進化の研究がおこなわれています。

進化生物学者のグラント夫妻は、1970年代から現在に至るまで、ガラパゴス諸島でダーウィンフィンチ（鳥）の仲間の研究を行ってきました。特に、ガラパゴスフィンチの研究は有名です。グラント夫妻は、周囲2 kmちょっとの火山島である大ダフネ島に生息するガラパゴスフィンチを捕獲し、足環をつけて識別することで、島から出て行ったり、島に入って来たり、死んでしまったり、新しく生まれてきたりするガラパゴスフィンチの個体数の増減を40年以上もモニタリングし続けてきました。1975年頃、島には 1400個体ほどのガラパゴスフィンチが生息していましたが、1977年に大きな干ばつが起きて、200個体ほどまで減少してしまいました。夫妻の研究により、この時に生き残ったガラパゴスフィンチの嘴の平均サイズは、干ばつ前の平均サイズよりもやや大きかったことが分かっています。この背景には食べ物が関係していました。ガラパゴスフィンチは植物のタネを食べるのですが、干ばつで植物が育たない中、食べやすい小さなタネが先になくなって大きなタネばかり残ってしまいました。すると嘴の小さな個体が数多く死亡し、大きなタネを食べられる、嘴の大きな個体が生き残りました。そして残った個体同士が繁殖した結果、嘴の大きさは遺伝し、次世代もまた大きな嘴を持つものが多くなったのです。干ばつが終わって、再び小さなタネをつける植物が増えてくると、徐々に嘴の小さなガラパゴスフィンチも生き残れるようになり、世代を経て嘴の平均サイズは元に戻っていきました。

このように生物は、その時々の環境に最も適した姿かたちをしたものが生き残り、その環境が持続する限り繁栄します。しかし、環境の変化がひとたび起こると、その姿かたちは数世代でも変化してしまいます。ガラパゴスフィンチの集団では、干ばつという環境の大変化によってたった１世代で嘴の平均サイズが変わりました。この変化は微々たるものに見えますが、このように世代を経て姿かたちが変わっていく現象こそが「進化」なのです。こうした小さな進化が積み重なっていくことで、種が分かれたり、恐竜が鳥になったりするような、大きな進化につながるのです。

日本では昨年、ガラパゴスフィンチに形の似た、小笠原諸島に生息するオガサワラカワラヒワという鳥が、独立種となりました。草のタネを好む日本本土のカワラヒワよりも大きな嘴を持っており、島の大きな樹木のタネを食べられる個体が生き残って世代を重ね、種分化したものと考えられています。

恐竜などに目を向けていると進化ははるか昔に起こったもののように思いがちですが、実はリアルタイムにも、そして短い期間でも起こっている、もっと身近な現象なのです。

自然史課学芸員 中原 亨

日本本土にすむ「カワラヒワ」